東日本大震災の教訓

天災と人災が重なった千年に一度の災害は、戦後の日本にとって最大の危機であった。平和時には意識に浮いてこない「物事の本質」が剥き出しになって出現し、日本人に反省と教訓を与え、多くの人の国家に対する意識を変えたのではなかろうか。また、変わらなければ日本の将来はない。

大震災が我々に示した教訓の「第一」は、日本人が民俗として生き残る為の最大の命綱は国家である、ということである。国家的な危機に対処できるのは地方自治体ではなく国家である。不幸な事に国家の舵とり役の大臣クラスがその任に適さない人物達によって占められ、国家の機能が延滞と混乱を生じた。国家は民族を守り、共に国家・民族を支え得る人材を育てる義務がある。その人材は人間学、国家観、歴史観の正しく凛とした教育によってのみ育成が可能となろう。

「第二」は、国民の生命、財産を直接守るのは自衛隊と言う日頃から命を投げ出し民族を守る為の心身共に過酷な訓練と教育を受けた団体の人々である、と言うことである。国家の最も具体的で目に見える働きは自衛隊や警察、海上保安、消防の働きであろう。特に自衛隊の働きは感動的であった。

自衛隊の救援活動

遺体収容では毎日粗末な弁当で体力を保ちつつ、一日中海水や汚水に半身を浸し遺体を捜索し、傷つき汚れた御遺体を自分の身内の様に一体一体を丁寧に

手で洗い清めていた。被爆の危険を身に受け、放射能放出を大きく抑制したハイパーレスキュー隊の働き。またアメリカの「トモダチ作戦」も誰も出来ない様な働きで政府の危機対応の遅れをカバーし立派であった。彼等は瓦礫に覆われた仙台空港を瞬く間に修復し、大型輸送機を飛ばし、各地に物資を届け、自衛隊の車両を運搬して我国の活動を根底から支えた。

仙台空港での復旧作業にあたる米軍兵士

艦長や海軍将兵は取り残された島々の人達に私物の下着まで供出し被災者を救った。自衛隊を暴力装置と言った仙谷さん、アメリカ海軍を軽蔑した小沢さんの胸中は？現代の国際社会に於いても、国内においても、あるイデオロギー主義者が口先で唱える「力なき愛」など何の役にも立たぬことを今回の災害は証明した。

天皇陛下はテレビを通して国民を励ますお言葉を述べられた。この中で、その働きを称賛され今後に期待する組織を列挙されたが、その筆頭に挙げられたのが自衛隊であった。現憲法下のもと、日蔭者として扱われた自衛隊が、その正統性を完全に認められたのである。隊員の方々の喜びは大きかったであろう。私共の年代の防大の生徒達は人目を忍び制服では外出できなかったのだから。彼等が求めるものは金や物ではない。国防に携わる己の人生に対する誇りと名誉であり、国民の暖かい理解と信頼の眼差しである。国防の使命と愛民の思いに彼等は命を賭けているのだ。民族を守る為には自衛隊を普通の民主主義国の軍隊と同じ行動が出来る法改正が急がれる。

注）天皇陛下ビデオレター全文
「この度の東北地方太平洋沖地震は，マグニチュード 9.0 という例を見ない規模の巨大地震であり，被災地の悲惨な状況に深く心を痛めています。地震や津波による死者の数は日を追って増加し，犠牲者が何人になるのかも分かりません。一人でも多くの人の無事が確認されることを願っています。また，現在，原子力発電所の状況が予断を許さぬものであることを深く案じ，関係者の尽力により事態の更なる悪化が回避されることを切に願っています。

現在，国を挙げての救援活動が進められていますが，厳しい寒さの中で，多くの人々が，食糧，飲料水，燃料などの不足により，極めて苦しい避難生活を余儀なくされています。その速やかな救済のために全力を挙げることにより，被災者の状況が少しでも好転し，人々の復興への希望につながっていくことを心から願わずにはいられません。そして，何にも増して，この大災害を生き抜き，被災者としての自らを励ましつつ，これからの日々を生きようとしている人々の雄々しさに深く胸を打たれています。

自衛隊，警察，消防，海上保安庁を始めとする国や地方自治体の人々，諸外国から救援のために来日した人々，国内の様々な救援組織に属する人々が，余震の続く危険な状況の中で，日夜救援活動を進めている努力に感謝し，その労を深くねぎらいたく思います。

今回，世界各国の元首から相次いでお見舞いの電報が届き，その多くに各国国民の気持ちが被災者と共にあるとの言葉が添えられていました。これを被災地の人々にお伝えします。

海外においては，この深い悲しみの中で，日本人が，取り乱すことなく助け合い，秩序ある対応を示していることに触れた論調も多いと聞いています。これからも皆が相携え，いたわり合って，この不幸な時期を乗り越えることを衷心より願っています。

被災者のこれからの苦難の日々を，私たち皆が，様々な形で少しでも多く分かち合っていくことが大切であろうと思います。被災した人々が決して希望を捨てることなく，身体を大切に明日からの日々を生き抜いてくれるよう，また，国民一人びとりが，被災した各地域の上にこれからも長く心を寄せ，被災者と共にそれぞれの地域の復興の道のりを見守り続けていくことを心より願っています。」

「第三」に天皇・皇室のご存在が日本民族にとって、如何に重要な意味を持っているか！　ということが明瞭に気付かされた。これは長い歴史の連続の中に育った日本人の遺伝子が成せる感覚、感情なのであろうか？　天皇・皇后両陛下、ならびに皇族の方々は被災地を訪れ、膝を屈し床につけたお姿で励ましのお言葉をかけられた。苦難の中、失意の中にある方々にとって、どれほど天皇・皇后のお言葉でどれほど癒され、勇気付けられ心の支えとなったか計り知れまい。日本人に生まれて良かったと感じられたものであった。単なるパフォーマンスの為、義理で訪れ「もう帰るのか」と被災者の方に叱責された管さんとは、誠実さや・優しさ・真心等天と地の差を国民は感じたはずである。

以上が私の国家観から感じた教訓である。

我々は敗戦によって多くの教訓を得たが、その教訓は現在生かされてはいない。右か左のイデオロギーの問題ではなく、日本の政治・経済・教育・防衛・外交の全般に言い知れぬ不安を感じない日本人は居るまい。６０年余りに渡り、国家の心棒である日本憲法の耐用年数期限が切れ、反日イデオロギーの弊害は日本人の心を傷つけ、正常な国家観を奪い、自虐的価値観を青少年に刷り込み、誇りと自尊心を喪失せしめ、のほほんと無関心な危機感のない日本人を量産し続けている。独特の歴史、伝統文化を続けてきた日本は戦後アメリカによる日本弱体化政策によって作られた「アメリカ人によるアメリカ人の為の日本憲法によって反日思想の国家観を植えつけられ、幼児心理が作用する小人しか育たなくなっている。

昭和天皇は日米開戦に対し、明治天皇が詠まれた「四方（よも）の海、皆兄弟（はらから）と思う世に、など波風の立ち騒ぐらむ」をお示しになり、個人とし

ての反対の意を伝えられたが、今、昭和天皇の意志を奉ずる志のある日本人は、四方の海に波風を立ち騒ぐことなど決して望んではいないが、北の海にある我が大地にロシアの大統領が踏み込み、韓国は竹島を実行支配し、尖閣諸島は中国の覇権主義により領海を犯されている。

諸君は御存じだろうか？　中国外務省から流出した２０５０年の極東地図は日本の本州中央から南の領域は中国の東海省に、又、中央から北は日本自治区として統治する侵略図が示されている。これは中国の日本侵略の隠された意図である。北朝鮮や中国は忌まわしい核兵器を背景に武威を押し立て日本の主権を明らかな意図をもって犯そうとする波はひたひたと迫っているのだ。侵略の波は津波より危険である。

日本人が発揮した個人的美徳に酔っている時期ではない。日本人が胸を張れるアイデンティティーは何かを静かに考える時期が今来ている。この厳しい国際社会の現実から目を逸らすことなく、核廃絶の呼び掛けや、口先だけの抗議や、弱腰の譲歩では中国の侵略の脅威を防ぐ事は出来ないと知るべきである。

憲法前文で日本を取り巻く国々には「ありもしない」平和を愛する諸国民の公

正と信義を信頼して我等の安全と生存を保持しようと決意したら、日本は将来どうなるのか真剣に考えて欲しい。この危機を脱する為の自主憲法を制定し、歴史上の大掛かりな国家形成を構想し着手する時期に直面している。日本は余りにも無策すぎるし、戦略がないし、危機感が無さ過ぎないか。日本が強き国となる為に我々一人一人が正しい歴史観と国家観の回復の為、歴史の学び直しが今必要なのだ。

今すぐに　！

平成２７年６月４日
志雲会塾長　有馬正能
【神大拳影に記載】